

御卒業おめでとう

令和3年度第73回

卒業証書授与式

式次第

1. 開 式 の こ と ば
2. 国 歌
3. 校 歌
4. 卒 業 証 書 授 与
5. 表 彰 状 授 与
 - 1) 日本私立中学高等学校連合会賞
 - 2) 桃 李 賞
 - 3) 皆 勤 賞
 - 4) クラブ功労賞
6. 学 校 長 式 辞
7. 理 事 長 祝 辞
8. 祝 辞
 - 1) 福 島 県 知 事
 - 2) 福 島 市 長
 - 3) 桃 李 の 会 会 長
9. 在 校 生 代 表 送 辞
10. 卒 業 生 代 表 答 辞
11. 式 歌 仰 げ ば 尊 し、 蛍 の 光
12. 閉 式 の こ と ば

福島成蹊高等学校



式 辞

三寒四温と申しますが、寒さの中にも春の温もりが感じられる本日、令和三年度第73回卒業式を挙げるにあたり、ご来賓、保護者の皆様のご臨席を賜り衷心より厚く御礼申し上げます。

ただ今、高等学校普通教育課程を修了しました卒業生諸君351名に、卒業証書を授与しました。卒業生諸君、卒業おめでとう。また、今日までご子息ご息女を育てられた保護者の皆様のご労苦に対し、ここからお祝いを申し上げます。おめでとうございました。保護者の皆様には、これまでの本校の教育に対するご理解、そして物心両面に渡るご協力を戴き衷心より厚く御礼を申し上げます。本当に有り難うございました。

卒業生諸君は、元号が令和に改まった年に入学しました。平成に東日本大震災を経験し、令和には災害の無い願いを抱いた人も多かった筈です。しかし、改元間を置くことなく令和を象徴するコロナ禍が世界を覆ったのです。2学年になった直後に、政府主導の登校禁止が始まりました。初めて経験する混乱の中で、オンラインを駆使し学習活動は何とか維持しましたが、手応えの伴う実質的な活動は大きな打撃を蒙りました。学校行事の殆どと、最大の行事である海外研修旅行も中止を余儀なくされました。また、クラブ活動をはじめ、諸活動も悉く制限を受けました。感染防止の観点から人と人の接触を避ける対策が講じられ、待ちに待った東京オリンピック・パラリンピックも延期されたのです。当時を振り返れば、東京オリンピック・パラリンピックが延期された時点で、その後の展開を推し量れるヒトは皆無と言って過言ではなかった筈です。しかし、一年後に開催されたスポーツの祭典では、無観客ではありましたが、少なくとも日本選手の活躍はこれまでのどのオリンピックをも凌ぐ成績で在った事は明らかでした。理由は解りませんが、私は、選手各位は勿論、関係者一同が危機的状況を撥ね退けるべく、奮闘したのだと思っています。実は、これと同じ事はここに列席する卒業生諸君にも当てはまりました。本校は開学以来108年の歴史を重ねて来ましたが、クラブ活動の成績を見ると、春の大会では総ての運動系クラブが県北大会に於いて3位以内に入ると言う目覚ましい戦績を上げました。これは、本校開学以来の快挙です。また、基本的に長期的なコロナ禍対応に対し、生徒諸君は事態を冷静沈着に受け止めてくれたと思います。具体的には学校が設けたルールに沿った生活を守ってくれました。本校は県北地域で最も生徒数の多い学校ですので、感染拡大のリスクも最大の筈です。しかし、大きな混乱を回避できた事は、諸君の叡智と行動のお陰です。この事に対し、改めて心から感謝します。また、保護者の皆様のご協力に対しましても、ここから御礼を申しあげます。本当にありがとうございました。

さて、卒業生諸君は、十年前に前代未聞の東日本大震災を、そして、コロナ禍と言う歴史に残る大災害を二度経験しました。自覚は出来ないものの、これ等の





経験を通じて身に着いた力が在る筈です。その事を実感できる機会を随所に垣間見る事が出来て嬉しかったです。特に、伝統の一つ、“良き市民”として生活してくれた事は誇りに思います。具体的には、日常の挨拶の良さ、制服のエレガントな着こなし、公共の場での思いやり等、『校訓』の理念を生活態度で示してくれました。更には、何事に対しても正攻法で取り組む姿勢は、学習・クラブ、生徒会、ボランティア活動でも多くの成果を残しました。特に、陸上競技クラブの全国大会出場はじめ、水泳クラブ共々東北大会に於ける数々の成績です。女子バレー部は春高バレーを掛けた大会で準優勝を果たし、春の高校バレーボール大会出場寸前まで行きました。また、野球部に於いては夏の甲子園大会への切符を掛けた戦いに於いて、昨年に引き続きベスト4に入り、多くの県民に印象付ける活躍をしました。これ等の活躍を通し、後輩達にも自信と気づきと言う、一筋の足跡を残したと思います。現在、進路に於いても努力が実り、既に決まっている人も居りますが、受験真っ直中の人も少なくはありません。どうか、最後まで全力で戦い抜いて下さい。私は、諸君が必ず志望校に合格すると信じています。

ここで、臆に慣れ親しんだ校訓「桃李不言下自成蹊」の背景に触れます。校訓は前漢時代の武将“李廣”の生き様と、分けて語ることは出来ません。“李廣”は、文帝・景帝・武帝の3代の皇帝に仕えた、虎をも射抜く弓の名手です。宿敵、匈奴の“单于”と勇猛果敢に戦い、かけがえのない邦を守った武人です。敵には恐れられましたが、同時に篤実さで敬われました。没後、彼の徳を惜しみ、司馬遷が『史記』の中で称えたのです。また、“李廣”が仕えた“武帝”は、西域への拡大を図った皇帝です。その結果、今日のように国際化が進み、人・情報・物が行き交う時代を作りました。

ところで、諸君に取って次のステージは、どの様に写っているのでしょうか。思うに、激しく変化に満ちた、混沌たる社会に映るのではないのでしょうか。人に因っては、一步踏み出すにも躊躇すら覚える。しかし、怯んでは成りません。そこは諸君の活躍の場であり、夢を叶えるステージでも在ります。これからは、家庭・学校の庇護下に在る甘さは許されません。何れの路も、自分で切り開く勇気が必要ですが、その時に、必ず“桃李のスピリット”が支えてくれます。曰く“自分に厳しく・他を思いやり・真摯に努力する”のです。どうか、校訓の将“李廣”同様、掛けがえのないモノを守れる人になって下さい。

結びに、諸君の母校が、次の時代も繁栄し名実共に誇れる学校とすべく、尽力することを誓い式辞とします。

令和4年3月1日

福島成蹊中学校・高等学校

校長 本田 哲朗





祝 辞

弥生三月、長く厳しかった冬の寒さも幾分和らぎ、吾妻の山並みや日々の足元にも、確かな春の息吹を感じる今日の佳き日に、福島成蹊高等学校351名の卒業生諸君、晴れてのご卒業誠におめでとうございます。

本来であれば、卒業生を暖かく励まし支え、限りない愛情を注いでこられた保護者・ご家族、そして関係各所を代表する皆様のご臨席を賜る中で卒業式を挙行出来ることを願っておりました。しかし、新型コロナウイルス変異株が次々と発生するとともに、その対策も次々と求められる中であって、極めて辛い判断ながら、在校生やご来賓の出席をご遠慮いただくとともに、一番近くで卒業生諸君に関わってこられた保護者の皆様に対し、一定の制限を受け入れていただく中で行う卒業式は、3年連続のものとなってしまいました。

このことを無念と感じている方々が多いこととは思いますが、今回の苦しい判断に対し、卒業生始め、関係各位のご理解とご協力を頂戴したものと深く感謝を申し上げます。

さて、学校法人福島成蹊学園は、大正2年(1913年)に、ここ福島の地に産声をあげて以来、幾多の変遷を経ながらも、校訓「桃李不言下自成蹊」の教えは一切変わることなく、108年の歴史を重ねる中で、卒業生2万8千余名を社会に輩出してまいりました。

開学当時、福島県内には53の私学があったと聞いておりますが、当時存在していた私学のうち、今に至り歴史を重ね続けている私学2校のうちの1校が、ここに臨んでいる卒業生諸君の母校であります。

前述のとおり、校訓は開学当初より一貫しておりますが、平成29年度において、教育理念に「心を育み、叡知を究める。」、そして今の時代に求められる教育を追求すべく、「感性と品性」、「知性」、そして「国際性」をキーワードとした教育目標を掲げました。

中学から入学の諸君は5年間、高校から入学の諸君は3年間、それぞれの教室に掲げられている教育目標に向かい合って来たはずです。

式の後、本校生として最後に臨むホームルームにおいて、もう一度それぞれに向かい合い、心にしっかりと刻みつけてください。

卒業生諸君にとってのここ2年余りは、まさに厳しい学校生活を余儀なくされました。令和2年2月28日付け文部科学省通達による小・中・高などの学校一斉臨時休業要請に始まり、以後、今に至るまでの学校教育活動の全てが、感染状況を見極めつつの難しい判断の中で進めざるを得ないものとなりました。感染症の特性から、最も悩ましいのが集団、あるいは対面での活動であることから、「学校」も特に注意が求められることになったのです。





私の記憶は定かではありませんが、近年において、学校最大の行事の一つである「研修旅行」の中止、宿泊を伴う各種行事、文化祭や部活動、そしてその延長たる各種大会など、感染症流行の波に翻弄されながらも、内外共に創意工夫の中で、やり得る最大のものを希求し続ける期間となったのです。まさにこの期間こそ、卒業生諸君にとっての学校生活と最も重なる学年となってしまいました。

この間、卒業生を含む在校生諸君、教職員の日々の的確な判断と、このことに対する保護者の皆様のご理解とご協力があったからこそ、今日の凜として厳かな中での卒業式を迎えられたものと、理事会として関係する全ての皆様に感謝を申し上げます。

さて、今年は北京冬季オリンピックの開催、そして同パラリンピックやサッカーワールドカップカタール大会の開催が予定されるなど、明るい希望をもって世界が繋がる機会となることを願うとともに、国際協調の面においても、温暖化対策の国際的取り組みである「パリ協定」へ米国が復帰したことなど希望に繋がる動きがあります。

その一方、同感染症の収束期は不透明であることも事実ですし、米・露・中など大国間の緊張拡大があること、この3国以外でも核・核兵器の近代化が進んでいること、さらに日本を含む世界各国の地球温暖化対策の不十分さなど多くの懸案は残されたままであり、世界にとってのリスクが減少しているとは、とても言えない状況です。課題解決が進まない根底には、民族主義に重なる自国（自分）ファーストの「利己」の考えが増長していることにあるのではないのでしょうか。

ただ、今回のコロナ禍は、「自分の命を守ることは、他の命を守ること」との気づきを多くの人に与えてくれました。対策の一つ「マスクをすること」は、自分を守ることよりも他人を感染させないことを第一としたものです。まさに他人を気遣う「利他」の精神を代表する行動と言えます。何れ感染症後の新しい社会にあって、辛酸を共にした経験は、人を想う「優しさ」があらゆる生活の大事な基盤であることを再認識するキーワードとなることを期待させます。

目の前の社会状況は厳しさ多々存在したままですが、来る4月1日には「成年」となり、「桃李の精神」の下に多くを学んだ卒業生諸君には、それぞれに選んだ新たな道を歩むに当たり、次代を果敢に切り拓く恐れぬ勇者たることを祈念し、理事会を代表しての祝辞とさせていただきます。

令和4年3月1日

学校法人福島成蹊学園

理事長 高橋 幸七





送 辞

阿武隈川で冬を越した白鳥たちも暖かい春の日差しに誘われ、飛び立つ季節となった今日の佳き日に、学び舎を巣立たれる三年生の皆様、ご卒業おめでとうございます。在校生一同、心よりお祝い申し上げます。

真新しい制服に身を包み、これから始まる高校生活に期待で胸を膨らませると同時に、不安を抱きながらこの福島成蹊高校の門をくぐられてから早三年の歳月が経とうとしています。今先輩方はここで過ごした大切でかけがえのない日々を昨日のこのように思い出していることでしょうか。そして、新たな生活への期待で胸がいっぱいになっているのではないのでしょうか。お別れに際して目を閉じると、私たち在校生にも先輩方と共に過ごした数々の思い出が蘇ってきます。

入学して何も分からず、おろおろしていた私たちに優しく声をかけ、時には引っ張ってくださった先輩方は、常に私たちの模範でした。部活動においては、厳しくも温かい指導が、私たちが常に成長へと導いてくれました。学業においては、一人一人が夢や目標の実現に向けて、朝早くから下校時間直前まで勉強に打ち込んでおり、その姿から進路希望を実現することの厳しさと、夢に向かって頑張るといふ強い意志を感じました。それだけでなく、私たち自身の現状や夢などを振り返る機会を下さいました。

近年は、新型コロナウイルスの影響により、数か月にわたっての休校や、いくつかの学校行事の中止など、様々な制限と我慢を強いられてきました。しかし、そのような状況でも桃李祭や体育祭では、感染対策をしながらも楽しもう、楽しませようという先輩方の姿勢に、私たち後輩は深く感銘を受けました。年齢が一つ違うだけなのに、どれほどその背中が大きく見えたことでしょうか。様々な行事のたびに先輩方の存在の大きさを知ることとなりました。

さて、卒業式を終えると皆様はそれぞれ新たな道へと歩いていかれます。時には、困難や投げ出したいくなることもあると思います。その時は先輩方が歩んできたこれまでを振り返ってみてください。足元を見てみてください。そこには皆さんが歩んできた道があります。この道には、嬉しかったこと、楽しかったこと、悔しかったこと、成蹊高校での三年間の思い出が沢山詰まっていることでしょうか。





先輩方が成蹊高校で勉学、部活動に励み、培ってきた力は必ず皆さんの将来の役に立ち、無駄になることは決してありません。先輩方はいつまでも私たちの憧れであり、目標です。先輩方が紡いできた成蹊高校の伝統を私たち在校生が絶やすことなく、責任を持って受け継いでいくことをここに誓います。

最後になりましたが、卒業生の皆様のご健康と、更なるご活躍をお祈り申し上げます、送辞とさせていただきます。

令和4年3月1日

在校生代表 菅野 慧斗

【送辞委員】

2年1組	服部ひなた
2年2組	菅野 慧斗
2年5組	丹治 恒貴
2年9組	石森 英彦





答 辞

桜の蕾が色づき始め、吹き渡る風にも春の香りを感じる今日の佳き日に、私達351名はこの伝統ある学び舎を巣立ちます。本日はこのような厳粛な式典を催していただき、卒業生一同、厚く御礼申し上げます。私達は、これから羽ばたく未来への期待で胸がいっぱいです。

三年間の高校生活を思い起こしてみますと、台風や地震など予想もしなかった出来事の連続でした。なかでも、高校一年生の時に世界中で蔓延したコロナウイルスによって、「ソーシャルディスタンス」という人の関わりが希薄にならざるをえない未曾有の事態が起きました。今まで通りの生活を送ることが不可能になり、辛かったです。しかし、コロナ禍で物理的な距離が必要であっても心の距離には関係がない、人には人がかけがえのないものだということを学ぶ機会になりました。

休校期間は、学校に行って友達に会いたいのには会えない、定期考査が無くなり勉強にも今一つ身が入らない、クラブ活動の大会が次々と中止になってしまうなど、先の見えない毎日が続いて何度も心が折れそうになりました。学校生活が再開して、当たり前前の日常が当たり前ではないことを実感したからこそ、目標に向かってひたむきに努力する仲間とともに、自分も精一杯頑張ろうという気持ちになれました。そして勉強でもクラブ活動でも、悩みを分かち合い励まし合うことで、前向きな気持ちで取り組むことができました。この状況をマイナスではなくプラスに捉え、「今できる最善のことは何か」と自分に問いかけながら多くのことに挑戦してきました。これらの経験は私達にとって大きな財産であり、今後の人生において必ず役に立つことでしょう。

また、学校行事を通して、仲間との絆をさらに深めることができました。球技大会では、炎天下の中、クラスの勝利のために全身全霊をかけて戦い、手に汗握る試合が繰り広げられました。中止になった研修旅行の代わりに行われた遠足では、友人と出かけるだけで心が弾み、とても楽しい時間を過ごすことができました。桃李祭では、どのクラスも工夫を凝らし、放課後遅くまで残って準備に取り組みました。意見の食い違いやトラブルの発生など試行錯誤の連続でしたが、その苦勞を乗り越えたからこそ、最高の思い出になりました。





このように私達が充実した学校生活を送り、日々成長することができたのは、多くの方々の支えがあったからだと感謝しています。先生方には、私達の進路実現に向けて、数多くの励ましの言葉をかけていただきました。普段は優しく、時には厳しいご指導で生徒と真剣に向き合い、最後まで私達の可能性を信じて応援してくださったことは決して忘れません。そして、一番近くで支え続けてくれた家族には、わがままを言ったり、時には不満をぶついたり、たくさん心配をかけました。それでも、十八年間いつも私達の一番の味方となってくれてとても心強かったです。本当に、ありがとうございました。

いよいよ私達の高校生活は幕を閉じようとしています。この福島成蹊高校が母校であることを誇りに、これからも全力で進んでいくことを誓います。在校生の皆さん、全校生で集まる機会が一度もなかったことが残念です。しかし皆さんが心を合わせてついて来てくれたからこそ、切り拓いた道があります。その道の先にある希望を信じて最後まで諦めずに前進して下さい。遠くから応援しています。卒業生の皆さん、共に笑い、共に悲しみ、共に乗り越えてきた日々は一生の宝物です。友人達とのたわいもない会話が心の癒しであり、どれだけ慰められたか分かりません。成蹊での三年間は青春時代の思い出として、いつまでも心の中で大切にします。コロナが落ち着いたら、マスクを取って、笑顔で会いましょう。

最後になりましたが、今日まで私達を見守り、支えてくださいました皆様に改めて御礼申し上げますと共に、福島成蹊高等学校の今後の益々のご発展を卒業生一同お祈り申し上げます、答辞といたします。

令和4年3月1日

卒業生代表 小池 陽夏

【答辞委員】

3年2組 菅野 希莉
3年3組 紺野 真由
3年7組 小池 陽夏





祝 辞

本日ここに、晴れて卒業式を迎えられた皆さん、御卒業おめでとうございます。心からお祝いを申し上げます。

また、今日の晴れの日まで、子どもたちに限りない愛情を注ぎ育てこられた御家族の皆さん、建学の精神に基づき情熱をもって教え導いてこられた教職員の皆さん、さらには温かい御支援と御協力を賜りました地域の方々に対しまして、深く敬意と感謝の意を表します。

東日本大震災から間もなく12年目を迎えようとしている今般、新型コロナウイルス感染症が世界各国で猛威を振るい、現在も私たちの生活に深刻な影響を及ぼし続けております。そのような中でも、福島の地から東京オリンピックがスタートし、本県ゆかりの選手が活躍するとともに、福島の魅力がメディアを通じて国内外に広く発信されました。また、葛尾村、大熊町及び双葉町の一部で準備宿泊が開始されたほか、県内初の震災遺構となる浪江町立請戸小学校の公開、相馬福島道路の全線開通など、本県の復興は着実に進展しています。

卒業生の皆さんは、これまで学校行事の中止や制限等もあり、不安や戸惑いの多い高校生活だったと思います。そのような中でも、感染防止対策を徹底しながら着実に歩みを進めてきた皆さんのひたむきな姿とその活躍は、県民に勇気と希望、感動を与えてくれました。これまでの学校生活の中で培った幅広い教養とかけがえのない友とのきずなは、生涯の財産となるはずです。今後は自らが選んだ道に向かって力強い一歩を踏み出し、それぞれの道で個性や能力を存分に発揮することを期待いたします。

東京オリンピック・パラリンピック競技大会は、新型感染症の影響で無観客となりました。一方で、各国の監督や選手の皆さんが、福島の農産物を「デリシャス」と国内外に発信していただけたことは大切な機会となりました。これは、県民の皆さんが、常に危機を乗り越えようと、様々な挑戦を継続して、「危機」を「機会」に変えていく御努力を続けてきたからです。本県復興の行く手には、まだ、いくつもの高い壁がありますが、乗り越えることは不可能だとあきらめるわけにはいきません。不可能の反対語は可能ではなく「チャレンジ(挑戦)」だと思います。「危機」を「機会」に替えるための「チャレンジ」をしっかりと継続し、ふくしまの明るい未来を切り開いていきましょう。

結びに、皆さんの前途に幸多からんことをお祈りし、新しい旅立ちに当たってのお祝いの言葉といたします。

令和4年3月1日

福島県知事 内堀 雅 雄





祝 辞

卒業生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。

本日、晴れて卒業証書を手にした皆さんは、それぞれに将来への夢を抱き、喜びと充実感で胸がいっぱいのことでしょう。

また、皆さんの健やかな成長をあたたく見守り、支えとなってくださったご家族の皆様、そしてこれまで熱心にご指導くださいました校長先生はじめ先生方におかれましても、感慨入りのことと思います。心よりお祝い申し上げます。

入学からこれまで、皆さんは勉学や文化・スポーツ活動などに打ち込んでこられました。たくさんの経験や思い出、喜びや悲しみを分かち合った仲間との友情は、かけがえのないものとなったはずです。

いよいよ明日からは、それぞれが志す道への第一歩を踏み出すことになります。希望と少しの不安もあることでしょう。これまで皆さんは、11年前の東日本大震災と原発事故、今なお、感染拡大の収束が見えないコロナ禍の渦中において、日々の生活や高校での活動、友達との付き合いなどに様々な制約があったことと思います。辛く苦しい経験ですが、それらを乗り越えて今日の日を迎えられた皆さん、自分に自信を持って歩みを進めてください。

今、社会はまさに変化の時を迎えています。新たな困難もあるかもしれませんが、そんな時こそ皆さんが成長するチャンスです。これまでの経験を活かし、困難を一つ一つ乗り越え、自分らしさを大切に新しい環境でチャレンジし続けてください。道は必ず開けます。

そして皆さんが、この福島に誇りを持ち、新しい福島づくりの主演として力強く歩んで行かれることを期待しています。

皆さんの前に希望ある未来が開けていくことを心より祈念して、お祝いの言葉といたします。

令和4年3月1日

福島市長 木 幡 浩



校歌

わが学び舎の
名もゆかし
桃李の花の
匂へれば
ものいはねども
暮ひくる
かげやこみちと
なりぬべき
金剛石の
みさとしに
阿武隈川の
よどみなく
進みゆく世に
遅れじと
いそしむ枝の
楽しさよ

仰げば尊し

一、仰げば尊し わが師の恩
教えの庭にも はやいくとせ
おもえばいととし このとし月
今こそわかれめ いざさらば

二、たがいにむつみし 日ごろの恩
わかるるのちにも やよわするな
身をたて名をあげ やよはげめよ
今こそわかれめ いざさらば

三、朝夕なれにし 学びの窓
ほたるのともし火 つむ白雪
わするるまぞなき ゆくとし月
今こそわかれめ いざさらば

螢の光

一、螢の光 まどの雪
ふみ読む月日 かさねつつ
いつしか歳も すぎのとを
明けてぞけさは 別れゆく

二、とまるもゆくも かぎりとして
かたみにおもう ちよろずの
心のはしを ひとことに
さきくとばかり うとうなり